2024年11月30日 中日新聞 朝刊 32頁

証言 女性参政権

政治に女性の声が必要

女性初の国会議員 越原春子さんのひ孫 越原もゆるさん（51）

上 越原春子さんの足跡を語る、ひ孫のもゆるさん＝名古屋市瑞穂区で

曽祖母の越原春子は1915（大正4）年に夫の和と名古屋女学校（名古屋女子大の前身）を創立しました。生まれは岐阜県越原村（現東白川村）。山に囲まれた村で、女子に学問は不要と言われた時代に、両親に反対されながらも勉強を続け、教師になるという小学生のころからの志を貫きました。

46（昭和21）年の衆院選の当時、春子は61歳。糖尿病を患い、東白川村で療養していました。本人は教育者として生涯人を育てていくという思いで、政治家になることは考えていなかったのですが、学校の理事や卒業生から立候補してほしいと後押しがあった。そこで女性の実質的解放の一助になれたらという思いから、当選するかしないかよりも声を上げることが大事だと決断したようです。

当時の既存政党はどれも自分の考えと違うと思ったみたいで、知人の弁護士と2人で「新生公民党」を立ち上げました。選挙活動も教員や卒業生が支援する手づくり。糖尿病の影響で、街頭演説では支えてもらえないと立てないほどでしたが女性の社会的地位の向上や教育機関の充実、男女の賃金格差の改善を訴えました。

当時、物資は配給制で配分を男性が決めていた。春子は育児用のミルクの普及が十分でないとも訴えました。政治に女性の声が必要であると自分が訴えてきたことが今度こそ法的に認められるチャンスだと捉え、初めて選挙に関われることを非常に喜んでいました。

愛知県第1区（名古屋市、一宮市など）で5番目に当選。上京後は親戚の家に下宿して、国会に通っていました。戦後の混乱期で食料がなく東京ではなかなか買えなかったようで、名古屋から運んでもらっていました。国会内は冬は冷え込みが厳しく、カイロで体を温めながら審議に臨んでいた。せきをしている人が多く、風邪をひいてしまうこともあったようです。

もともとが教育者ですから、日々勉強。そんなかから、国会で女性の地位向上につながる新しい憲法の審議に関われたのは非常に満足感があったようです。糖尿病との闘病もあり、残りの人生を考えたときに教育者として生きていきたいと考え、1期1年務めた後に名古屋に戻ってきました。

女性の社会進出は今や当たり前。学校を卒業したらほとんどの人が就職して、結婚や出産後も仕事を続ける人が多いですが、一方で離職率は先進国の中では高い。春子が訴えた幼保一元化や男女の賃金格差の問題は解決していない。女性の声が届くイコール政治が変わるという意味ではまだまだ。春子が現状を見ても、真の男女平等は実現できていないと思うでしょう。

春子は、「生徒はすべて自分の子ども」と考えていました。59年、学内の自宅で生徒の声を聞きながら息を引き取りました。

（聞き手・中川耕平）

こしはら・はるこ 1885（明治18）年生まれ。岐阜県師範学校教習所を経て、15歳で小学校の教員となる。1915年に名古屋女学校を創立し、女性の地位向上運動や教育の普及に尽力。袋帯と比べて短く、簡単に着物の帯が締められる「名古屋帯」を考案し、全国的な流行となった。46年の衆院選で当選後、新憲法の審議委員として日本国憲法の制定に努めた。

2025年 戦後80年 昭和100年へ

この記事・写真等は中日新聞社の許諾を得て転載しています。